環境のオントロギー

竹　原　　弘

はじめに

環境問題は地球共同体にとって急務の問題である。それは人類にとっての死活問題であるといえる。それ故に，様々なかたちで環境問題について論じられている。本稿は，かなり長期的展望の下に書かれるであろう環境論の最初の部分である。本稿は環境問題を，存在論的問題として捉える。すなわち，人間が存在していることにとってどの様な問題であるのか，何故環境問題が問題として惹起するのか，環境問題が倫理的問題として問題とされる存在論的根拠は何処にあるのか，といった事柄である。本稿はそうした環境問題を意味の問題と関連させて論ずる。すなわち，存在論とは意味論であり，人間存在にとっての意味を問う問題である。本稿はその一として，序論と第Ⅰ章から成立している。

序　論

（0－1）

人間存在は世界に散在している多様な意味へと関与することによって，その都度の己れの有り方を構築する。意味は，人間存在が世界の内に存在しており，世界という地平において現出する諸々の存在者へと関わることによって，己れの存在に関わる，そうした人間存在の己れの存在への関与構造との関わりにとっての意味である。すなわち，様々な内世界的存在者は単なる物体，裸の物体としての様態において現れるのではなくて，アプリオリに，有

意味的なものとして世界という地平構造において現出する。人間存在が存在する世界において，人間存在が存在することに対して，それへの関わりにおいて存在する内世界的存在者は，それへと関わる人間存在の関与構造，行為構造との関連において有意味的である。すなわち，人間存在が，自らが関わろうとする存在者を知覚する場合に，その知覚の内に，既にその存在者への己れの関与構造，すなわち己れの身体の振る舞い形式を投影しているのである。あるいは，その存在者へと関与することにおいて構築する己れの有り方を，先行的にその存在者の有り方の内に予描しているのである。すなわち，諸々の存在者は，その現れ以上の何かを現れにおいて知覚されているのではなくて，現れにおいて，人間存在のそれへの先行的関与形式を告知しているのであり，つまり，人間存在がそれへと関わることによって構築するある有り方を告知しているのであり，それがその存在者が有意味的であるという所以である。

したがって，存在論とは意味論であり，意味を問うことが存在論であるということが出来る。つまり，様々なものが存在していること，はどのようなことなのか，と問うことは，その存在者が，人間が存在していることとの関わりにおいて，意味として現出するということ，を問うことであり，結局は人間存在が存在していることを問うことになるのである。人間が時間的空間的に，いま，ここに居ること，とはどのようなことなのか，と問うことは，人間存在がその有り方のうちへと包摂することによって，己れの多様な有り方を築き上げる様々な存在者を有意味的存在者として把握することとの関連において問うことである。様々な存在者が有意味的なものとして現れる，ということは，それらの存在者が人間存在が存在していることとの関わりにおいて，自らを告知していることにほかならないのであり，したがって己れの存在を告知していることにほかならないのである。人間存在が諸々の存在者の意味へと関与することによって，その都度の己れの有り方を確立するのであるが故に，人間存在の有り方と諸々の存在者の意味とは相関的であり，それらが錯綜する中で，人間存在の有り方が仕上げられる。したがって，諸々

の存在者の意味は，人間存在が存在することへと反照するのであり，それらが有意味的であることは，人間存在の存在にとってであり，したがって意味を問うことは，人間存在の存在を問うことになるのである。

（0－2）

そうした人間存在の有り方を，我々はハイデッガーの基本的用語である「世界-内-存在」に従って，意味-内-存在と呼ぶことにする。人間存在は諸々の意味の集合の内に組み込まれて有るのであり，その中で多様な意味と常に関わりつつ存在し，また多様な意味の中から特定の意味を選びつつ，己れの有り方を選ぶのである。そして，意味の集合を我々は世界と呼ぶ。従って，意味-内-存在は，結局ハイデッガーの世界-内-存在とほぼ同意義であるということになる。人間存在が己れの存在へと関わることは，世界へと関わることとなるのであり，すなわち，人間存在の存在の根源への遡及は，世界へと遡及することになるのである。世界とは，先にも述べた如く，意味の集合であり，意味があるまとまりをもったものとして組み立てられている総体を言う。そうした世界が人間存在に，多様な有り方を贈与するのであり，人間存在のその都度の振る舞い構造を与えるのである。人間存在の意味への関与としての行為パターンは，世界によって人間存在に対して与えられる。確かに，人間存在は，自らの主体性を発動させることによって，諸々の意味へと企投し，自らのその都度の有り方を確立しているのであるが，その意味への関与形式は，世界によって与えられるのである。すなわち，人間存在が意味-内-存在として，諸々の意味の集合態の内へと自らを組み込ませて存在することによって，人間存在は自らのその都度の有り方を，世界を構成する意味によって贈与されつつ確立するのであり，自らの行為構造を形成するのであるといえる。

例えば，私が箸を使って食事をする場合に，箸を使うということは，私が箸という有意味的存在者へと関与して，それを媒介として食事をするという有り方を確立するのであるが，したがって，ある意味において私の主体的な

意味への企投が私の有り方を作り上げているということは出来る。しかし，別の側面から見るならば，私が食事をするという有り方は，箸という有意味的存在者の意味によって指示されることによる行為パターンの形成によるのであるといえる。つまり，私が箸を手に持って食事をするということは，箸という有意味的存在者の有する意味によって指示されることによってであるといえる。そして，そうした私の行為パターンは，箸を使って食事をする世界，すなわち意味集合態としての世界の一契機として箸をその中に組み込ませている世界の内に，自らを組み込ませている私の有り方に由来する。つまり，箸という有意味的存在者を一契機とする意味集合態としての世界において，私は意味-内-存在として有る，ということが私にそのような振る舞いパターンを指示しているのである。すなわち，私が箸を使って食事をするという身体の振る舞いは，箸を意味集合態の一契機としている世界から贈与された行為パターンであるということになる。

（0－3）

したがって，人間存在の身体の振る舞い構造は，意味の集合態としての世界によって与えられるのであり，それ故に，私のその都度の有り方は世界によって贈与されるのである。そうした人間存在の振る舞いパターン，行為パターンと関連して，それらを伴う知覚のパターンもやはり，世界から贈与されたのである。すなわち，知覚において我々は諸々の存在者を，ある意味付帯的存在者として知覚する。例えば，私がテレビという存在者を見て，それの有する意味を知覚しうるのは，意味-内-存在としての私が組み込まれている意味集合態としての世界を構成する一契機としてのテレビが，私のある有り方，つまりテレビを見るという有り方を構成する媒介として，私が組み込まれている世界を構成しているからであり，すなわち，私の日常性を作り上げているからである。テレビは私が存在している意味集合態としての世界の一契機として存在しているのであり，したがって，テレビを見るという私の有り方は，そうした，私が組み込まれている世界から与えられるのであ

り，それ故に，私はテレビを有意味的存在者として知覚しうるのである。また，テレビという有意味的存在者を構成しているチャンネル，スイッチ，音響調整のためのボタンといった一連の意味連関を構成している存在者に対して，私はある秩序立った関わり方をする。つまり，スイッチを押してテレビの映像を呼び出し，自分の好みの番組へとチャンネルを合わせるために，チャンネルを選択するボタンを押すといった一連の行為の連鎖によって，テレビに関与するのであるが，そうした一連の行為連鎖に伴って，私は一連の知覚連鎖を形成する。すなわち，ブラウン管を見て，テレビが映っていないことを確認し，次にスイッチを知覚し，チャンネルを選択するボタンを知覚する，といった具合に，一連の知覚連鎖を形成する。そうした知覚連鎖，つまり意味理解に伴う，一連の意味の組合せを追ってゆく知覚の連鎖は，私の身体の振る舞いに伴って生ずるのであるが，それも私の身体の行為パターンと同様に，世界によって贈与された知覚連鎖である。

もし未開社会の人間，つまり文明世界を構成する意味集合態的世界に属していない人間が文明世界へ来て，諸々の存在者を知覚しても，それらの意味を理解しえないであろうし，それらへと関与する行為パターンを持ち合わせないだろう。つまり，彼にとっては，文明世界は一種の混沌であり，いかなる秩序立った分節化も持たない世界である。すなわち，彼がそれまで組み込まれていた意味集合態としての世界によって贈与された行為パターン，知覚パターンは，文明世界では何の役にも立たないのである。

（0－4）

この様に自己が存在することの根源は世界に有る。自己の様々な存在様態は世界から与えられるのであり，つまり意味への適合としての行為パターンとして世界から与えられるのである。それでは，そうした意味集合態としての世界とは，より具体的にはいかなるものであろうか。我々は世界を意味集合態として規定したのであるが，世界を別の側面から見るならば，相互主観的行為錯綜態，あるいは相互主観的行為構造であると規定することができ

る。すなわち，意味集合態としての世界を維持するのは，諸々の意味へと適合することによって各々の日常性を形成している人間存在の有り方であり，したがって，意味の集合態は諸々の人間存在の行為の錯綜態の中において維持されているのである。つまり，諸々の意味へと自らの有り方を適合する人間存在の絡まり合い，錯綜態において意味が意味として存立し，維持されるのである。存在者の意味は相互主観的なものであり，私にとっても他者にとっても同一の意味を有するが故に，意味は意味として世界の内に定着しているのである。そして，意味が相互主観的なものである，ということは，諸々の人間存在，つまり私と私以外の不特定多数の他者がある意味へと同一の行為形態において関わることによって，各々の有り方を構築している，ということを意味する。不特定多数の人間存在が，同一の意味を有する存在者へと同一の行為パターンにおいて関与し，それぞれの有り方を築き上げることによって，日常性を形成する中において，意味は世界の内に定着し，世界の意味集合態の一契機と為るのである。すなわち，私にとってのワープロの有する意味と，A氏にとってのワープロの有する意味は同一であり，私もA氏も同じ行為形態においてワープロに関与することによって，ワープロという有意味的存在者を媒介として，同一の有り方を形成しているのである。そのように，不特定多数の人間存在がワープロという有意味的存在者の意味へと関わり，各々の日常性を構成するが故に，ワープロは，その意味を世界の内に定着せしめ，意味集合態としての世界の一契機を為しているのである。

相互主観的行為構造としての世界において，不特定多数の人間存在は，諸々の意味を介して己れの存在を確立し，また他者と関わっている。そうした中で，諸々の人間存在は無自覚的に意味を維持し，そのことによって意味集合態としての世界を維持しているのである。つまり，諸々の人間存在が，諸々の意味を己れの有り方の内へと取り入れることによって，各々の日常性を形成する中において，意味は世界の内に定着するのである。したがって，人間存在は意味集合態としての世界より，各々の日常的有り方を贈与されつつ，世界から贈与された有り方を維持する中で，意味集合態としての世界の

現在の形態を維持しているのである。したがって，既に述べた如く，有意味的存在者の意味とは，人間存在が存在することにとっての意味であるが故に，人間存在を離れて意味は成立しない。また，単独の人間存在にとってのみ何らかの意味を有する存在者は，相互主観的行為錯綜態としての世界へと定着して，意味集合態の一契機と為ることはない。ある存在者が有意味的であり，世界を構成する意味集合態の一契機と為るためには，不特定多数の人間存在にとって，同一の意味を有するものとして有意味的でなければならない，つまり，彼等の日常性を形成してゆく契機とならなくてはならない。

（0－5）

それでは，そうした諸々の意味を維持することによって意味集合態としての世界を維持する相互主観的行為構造としての世界における人間存在相互の意味を介した有り方とはいかなるものであろうか。現象学的社会学者であるアルフレッド・シュッツは，彼の言う社会的世界（social world）を，「社会的直接世界」「社会的同時世界」「前世界」「後世界」の四つに分類するのであるが，まず，「社会的直接的世界」とは，「私がある仲間と共通の時間空間を共有しているならば，そしてその時に，私は彼を直接経験する」[1] そうした世界である。つまり，「社会的同時世界」とは，私と他者が同一の時間と空間を共有することによって，私が他者を直接的に経験しうる状況，つまり私が他者の身体を知覚しうる状況を言う。それに対して，「社会的同時世界」とは，私と他者が同一の時間，つまり「いま」という時間のみを共有するが，共通の空間を共有しない状況を言う。その場合，他者の身体は私の眼前に存在しないし，したがって他者の姿を私は見ることは出来ないが，同一の時間のみを共有している，つまり「いま」という時間，あるいは共通の時代を共有している関係状況を言う。そうした状況においては，つまり私と同

注1）Alfred Schutz: *Collected Papers II*, Martinus Nijhoff, The Hague, 1976, p. 23.
邦訳『アルフレッド　シュッツ著作集第3巻，社会理論の研究』渡辺光他訳，47ページ

一時間のみを共有している他者との関わりは，偶然その他者と同一の空間を共有したとしても，私にとってその他者は匿名的である。

「私はある郵便局員と対面状況に居る場合も，私は彼を『郵便局員』として捉えている。さらに，私が手紙を投函する時には，彼の行為が個別的主観的意味連関（給料，保障，上司等）において為されるといった，人的理念型としての『郵便局員』には注意を向けることすらない。私にとって関連があるのは行為パターンのみであり，この場合には，手紙を取り扱う標準化された類型的手順のみである。」[2)]

「類型的理念型は性格に由来する理念型と比べると相対的に匿名的であるとしても，それ以外の理念型，特に社会的集合態に関係する理念型に比べれば，相対的に具体的である。」[3)]

シュッツの言う，このような人間の類型化された側面，すなわち我々はその人間の社会的機能にのみ関わる，ということは示唆的である。我々が世界において他者と関わる時に，他者の個別的な人格的面に関わる場合よりも，他者の世界における機能にのみ関わる場合の方がはるかに多い。私が郵便物を受け取る時，あるいは銀行で金を誰かに送る時に関わる他者が，どのような性格をしているか，どのような趣味を持ち，どれだけの給料を貰っているか，といったことは私にとって，どうでもよいことなのであり，相手が，私が期待する役割を果たしてくれればよいのである。

そして，私が他者に私が期待する役割を演じてくれることを，他者の演ずる機能に対して期待するためには，それ以前に他者と私が同一の意味集合態の中に組み込まれているということがなければならない。すなわち，私と他者とは，同じ意味の集合を共有しているのであり，そうした意味の集合へとその都度己れの存在を企投して，それぞれの有り方を確立しているのである。同一の意味の集合を共有するということは，互いがそれぞれの有り方，つまり意味へと適合し，意味を媒介とした有り方を理解し合う，と

2）*Ibid.*, p. 50f，邦訳，80ページ
3）*Ibid.*, p. 51，邦訳，81ページ

いうことが可能になる前提である。すなわち，私と他者との間の何らかの人間的繋がりは，互いが同一の意味を共有することにより，意味へと適合することによって作り上げる互いの有り方を相互に理解することによって可能となるのである。すなわち，私が他者の有り方を理解し，他者が私の有り方を理解すること，つまり他者認識が可能であるためには，私と他者が相互主観的に理解している諸々の意味を共有していることがなければならない。既に述べた如く，私のその都度の有り方は，私の存在がある意味へと適合することによって構築されるのであり，また他者の有り方の場合も同様であるならば，存在しているということは，意味を己れの存在へと取り込むこと，あるいは己れを意味へと適合せしめることであるといえる。したがって，私が他者の存在の仕方を理解することは，私と他者との間に意味の共有がなければならないわけであり，同一の意味の共有があって私は他者の有り方を理解しうるのである。こうした互いの有り方を互いに理解するということは，互いの内面性の理解，所謂理解し合う，ということに先行することであり，互いの内面性の理解が可能であるためには，そのための前提として互いの有り方の理解がなければならない。したがって，意味集合としての世界の中に，私と他者が組み込まれて，そこに互いが同一の意味を共有することによって，私と他者との間の何らかの関わりが成り立つのである。

（0－6）

したがって，他者の存在を，意味集合態としての世界において与えられた役割，機能を果たす存在として理解するためには，他者と私が同一の意味集合態を共有していること，あるいはその中に組み込まれて有ることによって，その中から互いに通底する存在の仕方を汲み取ることが必要である。そして，私も他者も世界から配分された機能を意味集合態の中で演ずるためには，私と他者をその役割面において，あるいは機能面において結び付けるシステムがなければならない。私も他者もシステムに内在的であることによっ

て，役割を演ずる者として出会うことが出来るのである。パーソンズは次のように述べている。

「社会システムは，その構造的に重要な構成要素に関していうと，分化したシステム（a differentiated system）である。我々の当面の目的のために，我々は次のことを仮定出来る。すなわち，分化しているのは，これまでの論議で大いに取り上げてきた構造の単位，つまり行為者の指向パターンはもとより，行為者の客体としての意義をも含んでいる役割である。したがって，分化したシステムとして，システムを分析するための基本的な焦点は，幾つかの役割がそのシステム内で分化している様式，ついでこれらの分化した役割が統合して，言い換えれば『噛み合わされて』一つの機能作用しているシステムを形成する様式に関係している。」[4)]

すなわち，システムとは，複数の行為者が相互に連関するためのものであり，そこにおいて各人はシステム全体の機能が作用するために，分化された役割を配分されて，各々の役割を異にすることによって，全体のシステムの作用に貢献するのである。社会システムに内属されている私は，自らの欲求充足のために他者に配分された役割に期待する。例えば，レストランに入った私は，そこのウエイターないしウエイトレスに対して，食事を供給してくれることを期待するのであり，それはそのレストランのウエイターないしウエイトレスのパーソナリティに対してではなくて，彼等がシステムにおいて果たしている役割に対してである。

「第一に，問題の役割は，各人が関与する役割の一つにすぎない。各人に対する期待は，この役割に関しては同一であるとしても，それぞれの役割システム全体は，限界的な場合においてのみ同一でありうる。そうであるならば，それぞれの場合において，個々の役割は，各個人のそれぞれ異なった役割期待システムの全体（a different total system of role expectations）に調和しなければならない。個人が関与しているすべての異なった役割は，彼

4）Talcott Parsons : *The Social system*, The Free Press, New York 1964, p. 114.

等の動機付けシステムの中で相互に依存しあっている。」[5)]

したがって，社会システムにおいて個々人に配分された役割は，特定の有意味的存在者に関わり，それを欲求し，それの意味へと己れの存在を適合せしめることを望む不特定多数の人間存在にそれを与える一翼を担う。例えば，私がレストランに入って，食事を食べることを欲求する際に，私はそのレストランのウエイターないしウエイトレスが，私が注文する食事を私のテーブルに運んでくることを期待するわけであるが，彼等は，私に，私が欲する食事を私に齎らすための幾つかの分節されたプロセスの一端を担った役割を演じているにすぎない。私が注文した食事を私が口にするまでに，その食事を私が食しうるように加工し，あるいはその素材を供給し，運搬する等々，様々に分節された役割が介在しているのであるが，それらがシステムとなって，役割相互が相互依存的に組み合わされることによって，私はレストランで食事を食するという，いわば意味適合行為，あるいはある有り方を確立することが出来るのである。したがって，システムとは，有意味的存在者を配分し，不特定多数の人間存在がそれを享受するためのシステムであるということが出来る。あるいは，人間存在が，意味の集合態としての世界に散在している多様な意味へと適合するための秩序付けのためである。世界は多様な意味によって構成されているのであるが，それらの意味へと適合して，ある有り方を確立することにより，人間存在は日常性を構成している。そうした多様な有意味的存在者へと各々の有り方を適合し，各々が各々の有り方を確立する様に，有意味的存在者を世界の既存の意味集合態へと接合せしめるのが社会システムである。ある人間はタクシーという有意味的存在者へと己れの有り方を適合せしめることによって，己れの役割を遂行しているのであり，ある人間は新しい家電製品を開発し，それを既存の意味集合態へと接合せしめようとするために，諸々のメカニズムに関与する等々。そのように，社会システムは，各々の人間存在にある役割を振り当てることによって，意味を配分し，システム全体を調和させるのである。そして，私がある

5）*Ibid.*, p. 44.

役割を配分された他者に面し，彼が，私が期待する役割を演じうるのは，私と彼との間に介在する社会システムに依るのである。すなわち，私と他者とが同一の意味を共有する中で，つまり同一の意味集合態としての世界の内へと組み込まれる中で，そうした意味集合態を秩序付け，配分するシステムが，私と他者の間に介在することにより，私は他者をある役割を演ずる人間存在として理解するのである。あるいは，他者も，私を，彼のそうした役割に期待する人間として理解するのである。

（0－7）

したがって，社会システムによって分節された役割とは，世界を構成する多様な有意味的存在者への関与の仕方の限界付けであり，逆に言えば，ある役割が関与する有意味的存在者の意味の範囲を確保するためのものである，ということができる。ある役割が演ずる機能は，システム全体が機能するために，ある特定の有意味的存在者の意味へと己れの存在を関わらしめることによって，己れの有り方が生ぜしめる結果，あるいは効果をシステム全体へと還元するためのものである。人間存在がある役割を演ずることによって，システムによって分節された機能を演ずるということは，己れの役割が関与する有意味的存在者の意味領域の限界付け，あるいは確保をすることによって，世界の意味集合態を秩序付け，それらが不特定多数の人間の有り方へと適合することを促すのである。システムは，世界の分節化であり，言い換えるならば，世界を有らしめている意味集合態の分節化であるといえる。既に述べた如く，人間存在は，意味集合態としての世界より，己れの日常的有り方の形態，すなわち意味へと関わる行為パターンを贈与されるのであるが，システムは，そうした人間存在が組み込まれている意味集合態としての世界を分節し，秩序付けることによって，各々の人間存在の，世界における諸々の意味への関与形式を配分するのである。すなわち，意味集合態としての世界の中に各々の人間存在は組み込まれることによって，それぞれの有り方を世界から贈与されて，各々のその都度の有り方を構築し，また日常性を構成

しているのであるが，ある人間存在とある人間存在，すなわち自己と他者とが，有意味的存在者の意味へと己れの有り方を適合しつつ関わる形態は，システムによって媒介されているのである。すなわち，各々の意味への関与領域がシステムによって限界付けられている役割を演ずる中で，私と他者は出会うのである。すなわち，私が他者へと何らかのかたちで関わるのは，私がある役割を演ずることにおいてであり，その限りにおいて，ある役割を演ずる他者の役割に期待することによってである。例えば，大学生としての私は，大学生という，社会システムによって配分された役割を演ずることによって，同じ大学生である他者に，友人としての関わりを期待するのであるし，また教官に対しては，教官としての役割に対して，すなわち彼が有している知識に期待するために関わるのである。したがって，社会システムは，各々に役割を配分することによって，各々が関与する意味領域を確立し，さらに他者との関与形式をも規定するのである。それ故に，私と他者の相互理解，互いの有り方の理解は，各々の意味への適合の仕方の理解であると共に，システムによって配分された互いの役割の理解でもある。

それでは，世界とシステムとはどのような関係に有るのであろうか。ルーマンは，世界について次のように述べている。

「とはいえ，同時にまた，世界はあらゆる可能性の，つまりあらゆる有意味的な指示の，単なる総合以上のものとして追体験されるものでもなければならない。世界はそうした総和であるばかりでなく，そうした可能性の統一体なのである。とりわけこのことは，世界地平がそれぞれの差異に対して差異としてのそれ自体の統一性を保障しているということを言い表している。したがって，各々のシステムにとって世界はシステムと環境とのそれぞれの差異のすべてを総合した統一体であることにより，その世界地平は，すべての個別的システムのパースペクティヴの差異をも廃棄しているのである。それ故に，そうしたシステムがそれぞれの差異を実際に作り出す際に，世界は『生活世界』として機能している。そのことからして，世界は，その時点で一時的に疑いを解かれたものであり，また前もって了解されたものであり，

あるいは背景についての疑いのない確実さであり，さらにはこうしたことを齎らしているメタ確実性にほかならず，そんなわけで世界は，区別のすべての解消と区別のあらゆる導入をなんらかの方法で統一させているのである。世界は有意味的な自己準拠の循環性の，その時点で前提され，しかもいつでも例外なく前提にされている閉鎖性なのである。」[6)]

「機能的-構造的理論は構造と過程との区別をも機能的な観点のもとで捉え，この区別を現実の機能的に有意味な分化とみなし，こうして複雑性の問題に関係付けることが出来る。この理論は，構造と過程との分化の機能が二重の選択性による複雑性の縮減にあると見る。」[7)]

この様にルーマンは，世界とはシステムと環境を統一した統一体であると述べ，そしてシステムは，世界の複雑性の縮減という効果を世界に与える，とする。世界複雑性の縮減とは，言い換えるならば，人間相互の関わり，人間存在の錯綜を秩序付けて，何らかの形で秩序化することによって，生起する出来事の偶然性，偶発性を減少せしめることである。ルーマンのいう世界と我々のいう世界とは，必ずしも同じではない。我々の意味する世界とは，既に述べた如く，相互主観的行為構造として，人間存在の錯綜態であり，そこにおいて意味が産出される場である。すなわち，意味の集合態がそれとして存在し，世界を構成するためには，それを成り立たしめ，維持する人間存在の行為の錯綜態がなければならない。人間存在の意味への適合，意味を媒介にしたその都度の存在の確立が，相互主観的行為構造を成り立たしめているのであり，そこにおいて意味の集合態が存在しているのである。世界とは，したがって，意味が成り立ち，存在する場であり，それは人間存在と意味との関わり，人間存在が己れの有り方を意味へと適合せしめて，己れの有り方を構築することの集合態である。世界とは，意味集合態であり，言い換

6）N. ルーマン『社会システム論（上)』佐藤勉監訳，恒星社厚生閣，1993，101ページ

7）N. Luhman: *Sociologie als Theorie socialer Systeme* (aus: *Sociologische Aufklälung*, Westdeutscher Verlag, Opladen, 1971, S. 119.)

えれば，相互主観的行為構造である，ということはそのような意味である。そして，システムとは，そうした意味集合態としての世界を秩序付ける。ルーマンのいう世界の複雑性の縮減である。

意味は，あるいは有意味的存在者は，世界における適所に配置され，そこに場を得るわけであり，いわば，ハイデッガーのいう世界適合性(Weltmassigkeit)[8]を有しているのであるが，そうした有意味的存在者に世界適合性を与えること，それはある意味では，世界を世界たらしめることであり，世界を構成することであるが，それを為すのは人間存在の存在構造，すなわち意味への適合の様式，身体の振る舞い構造である。

「いかなる適所性が何らかの道具的存在者に関してあるかは，その都度の適所全体性（Bewandtnisganzheit）に基づいて予めその輪郭が規定される。例えば，仕事場における道具性（Zuhandenheit）において構成している適所全体性は，個々の道具よりも『以前に』存在しているのであって，あらゆる調度と不動産を備えている屋敷の適所全体性も，同様である。しかし適所全体性それ自身は最終的には，ある用途へ帰ってゆくが，そこにおいてはもはやいかなる適所性もなく，この用途自身は世界内部で道具的に存在している存在者ではなく，むしろその存在が世界-内-存在として規定される存在者，すなわち，その存在体制（Seinsverfassung）に世界性自身が属している存在者である。この第一次的用途性は何らかの適所性がそのもとにある適所性がありうるものとしての用途性ではない。第一次的な『用途性』は，そのものの-ためである。しかし，この『目的』はつねに現存在の存在に関係し，この現存在には，その存在において，本質上，この存在自身を目的としてそれへと関わることが問題である。」[9]

つまり，諸々の有意味的存在者がその有意味性を充分に発揮するための場を得るために世界の中に配置されることは，人間存在の有り方，すなわち

8）M. Heidegger : *Gesamtausgabe Bd. 2,* Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1977, §18.

9）*Ibid.*, S. 112f.

諸々の有意味的存在者へと己れの有り方を適合する存在様式に基づくのである。つまり，人間存在が，ある有意味的存在者へと自らの存在を関わらせ，ある有り方を構築するのに最も適した世界内の場を，その有意味的存在者に得さしめるのである。そのことによって，その存在者は，有意味的存在者としての有り方を充分発揮することが出来る。したがって，世界に意味を配置し，意味集合態としての世界を構成するのは，人間存在の有り方，意味へと適合するその振る舞い構造である。そして，人間存在は，ある面においては，己れの主体性に基づいて意味へと企投し，己れの有り方を確立するのであるが，別の面では，人間存在は意味集合態としての世界に組み込まれて有ることによって，己れの存在の意味への関与形式，意味を媒体とした有り方を世界から贈与されるのである。つまり，人間存在の意味への関与の主体性と，その存在，意味への関与様式の世界からの贈与は，同一の事態の二つの側面であり，いわば表と裏である。

それに対して，システムはそうした人間存在の意味へ向っての企投の様式，あるいは世界による人間への，存在の仕方の贈与を秩序付けることにより，ルーマンが述べる如く，世界の複雑性の縮減を為す。既に述べた如く，システムは個々の人間存在に役割を与えることによって，適合する意味領域を限界付け，他者の意味適合的行為，有り方との間に相互連関をもたせる。そのことによって，世界における人間存在の意味適合行為，あるいはそれを介した他者との関与の複雑性を縮減することを目指す。もしシステムが世界の内に存在しないならば，我々は自らの日常性を構成するために，その構成要素としての有意味的存在者のすべてを自らの手で調達しなければならない。原始的社会においては，役割の分化が存在しなかったが故に，人々はあらゆることがらを自給自足で賄ってきた。しかし，現代の如き多様な意味が存在する世界に居る我々にとって，そのような事は不可能であり，各々の意味適合領域を限界付けることによって，他者の意味適合的行為と連関させる相互行為のシステムが介在しなければならない。また，各々の人間存在の意味適合行為を，ある意味領域に関して制限する，ないし何らかのかたちで制

度化することを為すことによって，人間存在の意味適合行為から生ずる効果の複雑性を縮減する。例えば，公共住宅に住むという意味適合行為，有り方を目指すためには何らかの手続きのプロセスを必要とすることによって，すなわち制度化することによって，その意味領域における人間存在の意味適合行為の複雑性を縮減することが出来る。この様にシステムは，意味集合態としての世界を秩序付けることによって，そこに組み込まれている人間存在が諸々の意味へと適合して己れの有り方を確立することを容易にする。人間存在の有り方，意味へと適合する行為構造によって，世界適合性を与えられた諸々の有意味的存在者は，各々の人間存在を中心として，意味の連関を形成することによって，意味集合態としての世界を構成するのであるが，そうした世界における人間存在の意味適合行為の錯綜態を分節化して，秩序を与えるのがシステムである。人間存在は，世界において役割として他者と関わるのであり，世界を分節化するシステムの機能を果たす者として他者へと関わるのである。システムは，人間存在が諸々の有意味的存在者へと適合することを秩序付けることとは，ある領域においてその適合の仕方を制度化して，無秩序な意味適合行為，いわゆるアノミー（anomie）を排除することを目指す。

「制度（institution）とは，問題の社会システムにおける戦略的構造的意義を担っている，制度化されたいくつかの役割統一体（role integrates）の複合である，と言えるだろう。制度とは役割より高次の，社会構造の単位とみなされるべきであり，そして実際にそれは相互に依存する複数の役割パターン（role-patterns）またはそれらの構成要素から成り立っている。」[10)]

人間存在が有意味的存在者へと己れの存在を適合することによって，世界の内にある有り方を確立することを目指す行為を秩序付け，限定し，他の意味適合行為との間に関連性をもたせるのが制度であり，パーソンズも述べている如く，それは役割の集合体であり，より高次のシステムの単位である。制度化された己れの役割範囲を越えて，他者が関与する意味領域へと侵入す

10) Parsons, *op. cit.*, p. 39.

るならば，そこにアノミーが生ずる。

（0－8）

また，一人の人間存在は，複数の役割を担っている場合が殆どである。「すべての個人行為者の複数の役割は，それらの役割の間で時間的配分をしなければならない。」[11] 例えば，一人の人間が演ずる仕事における役割と家族における役割は，異なったシステムにおける役割であり，異なったシステムによって配分された役割であり，したがって，仕事に従事する場合に属するシステムによって配分された役割が関与する意味領域と，家族というシステムによって配分された役割が関与する意味領域とは，当然のことながら異なるものであり，したがって両者の役割の間で，その役割を演ずることによって関与する意味を媒介として確立される有り方は異なる。したがって，それら複数の役割を演ずる場合に，時間配分しなければならない。人間存在は，時間的存在であり，彼の存在が属している現在という時間から死に至る時間の間における自らの存在の仕方は未決定的であり，したがって，人間存在は自由に自らの有り方を意味へと適合して，己れの有り方を確立することが出来るのであるが，しかし，人間存在の時間的有り方に基づく自由とは，自らの存在が関与する意味以外の意味を己れの存在から排除することである。同一時間に複数の意味へと関与して，異なった有り方を築き上げることも不可能ではないし，時として我々はそうした事を為している。例えば，煙草を吸い，コーヒーを飲みながら，ワープロのキーボードを打つといった様に，同時に幾つかの意味へと自らの有り方を適合せしめて，自らの有り方を確立するという場合も有る。しかし，同時に関与する意味の領域は当然のことながら，限界を有しているのであり，その場合に，自らの有り方の適合から排除する意味領域も生じてくる。したがって，人間存在が意味へと関与する有り方の基盤としての自由において，人間存在は自らの意味への関与の時間性を配分しなければならない。それと同様に，役割に関しても同じで，同一時間

11) *Ibid.*, p. 91.

に二つの役割を演ずるということは，我々にとって非常に困難であるので，複数の役割をこなさなければならない我々は，役割の時間配分をしなければならない。すなわち，何時から何時までは，この役割を演じ，それ以降の時間においてはもう一つの役割を演ずるといった具合に。そして，そうした時間配分を為すのもシステムである。すなわち，人間存在の意味への適合の領域を分節し，秩序付けるシステムは，空間的に意味領域を限界付けて，個々の人間存在が己れの担う役割を演ずる者として関わる意味領域を空間的拡がりにおいて制限し，あるいは確保すると共に，時間的にも限界付ける。すなわち，あるシステムが配分した役割が関与する，システムがその役割に関して配分した意味領域への関与の時間を，システムは限界付ける，あるいは逆に言えば，ある一定の時間内においては，その役割を担う人間存在はその役割に配分された意味領域へと関与しなければならない，という義務を与える。

そうしたシステムの秩序付けは，今述べた如く，個々の人間存在の有り方，意味への適合の仕方の秩序付けだけでなく，意味集合態としての世界の秩序付けを為す。言い換えれば，システムが世界内の意味を秩序付けるが故に，人間存在の有り方が分節されるのであるといえる。人間存在に対して，ある役割を配分することは，世界から贈与される有り方，意味への適合行為のパターンを制限することであり，あるいは確保せしめることである。意味集合態としての世界，行為錯綜態としての世界をシステムが秩序付けることは，個々の人間存在が世界から贈与される有り方を限界付けられることであり，あるいは，ある制限された有り方を世界から贈与されることを保証されることを意味するわけであり，そのことがシステムによって個々人に対して役割が配分されることである。したがって，システムは世界の側からも，個々人の側からも，意味領域を秩序付けるのである。

（0－9）

そのように，システムによって意味が秩序付けられた世界において，すなわち相互主観的行為構造において，人間相互の関与形式も秩序付けられる。

人間存在は，意味へと己れの存在を適合することによって，自らの有り方を確立し，そのことによって意味集合態としての世界を維持しているのであるが，そうした意味への適合行為としての有り方において，互いの存在の仕方を理解し合う。しかし，人間存在と人間存在との関わりは，システムを媒介としない場合はアットランダムであり，無秩序である。大都会の雑踏の中で，無数の人間が絶えず交錯するのであるが，そうした場合に，彼等のある空間的場における出会いは無秩序であり，互いの顔もその役割も知らずに，ただ交差点を，広場を行き交う。その場合に，彼等は同一の意味集合態の中に組み込まれている者として，同一の意味集合態を共有しているが故に，互いの有り方を理解し合うのであるが，しかし彼等の関わりはそれ以上に深まらない。そして，システムを媒介にして人間と人間とが出会う場合に，互いの世界における有り方の理解だけではなく，互いの役割，互いの意味関与領域の理解も生ずる。つまり，システムは人間と人間の出会いを秩序付け，互いの存在の仕方の理解に基づいて，世界における互いの役割，意味関与領域についての理解をも生ぜしめるのである。しかし，先に引用したシュッツの文にもあるように，システムによって秩序付けられた人間存在相互の関わりは，無媒介的な出会いに比べるとアットランダムではなく，それなりに秩序付けられてはいるが，大部分の場合，彼等のシステム内の役割機能にのみ関わる場合が多く，相手のキャラクターにまで関わる場合は少ない。

そうした人間存在と人間存在の多様な存在交錯による意味の維持によって，世界は成り立っているのであり，世界とは多様な人間が相互に関わり合い，意味を維持する場である。意味はそうした人間相互の多様な交錯，関与によって，あるいはその中で存在するのであり，それが意味が成立する場であり，また意味が存在する場である。既に述べた如く，人間存在相互の関わりが成立する根拠は，同一の意味集合態の共有であり，すなわち同じ意味集合態としての世界に共属していることである。私が他者の有り方を理解するのは，他者が何らかの有意味的存在者の意味へと彼の有り方を適合せしめているその仕方について，すなわち意味との共犯によって構築された彼の有り

方についてである。したがって，他者の存在が関わっている意味についての理解が彼の有り方の理解である。

人間相互の関わりの大部分は匿名的であり，先に述べた如く，特に大都会の雑踏の中で行き交う人間，地下鉄の中でたまたま同じ車両に乗り合わせた不特定多数の他者達等々，の如く，相手の名前も役割も知らないまま，一瞬の間同一空間を共有するだけで通り過ぎて行くだけの関わりである。また，システムを介した関わりの場合も，他者の役割機能についての理解はあるが，それ以上の関わりへと進んでゆく場合は稀である。我々が人間性と人間性との関わりを有する他者は，人間存在の数からするならば，極めて少ない。そうした関与の仕方の厚薄はあるにしても，多様な他者との関わりの中で，意味は維持されてゆき，世界の現在有る形態が存続してゆく。しかし，意味集合態としての世界も，永遠に同一の形態のまま存続するわけではない。言い換えるならば，人間の意味への関与による存在の仕方も同一のまま永遠に存続するのではない。同一時間を共有する我々が共有する意味集合態は少しずつ変化してゆく。すなわち，新しい有意味的存在者の出現によって，新しい意味が産出されることにより，既存の意味集合態の中で淘汰される有意味的存在者が出て来，そのことにより意味相互の関係形式に変化が生じ，意味集合態の全体に変化が起こり，人間の存在形態，すなわち意味へと関わることによって作り上げる存在も変化してくる。新しい意味は，構造的に見るならば，既存の意味の集合態の中の空白から生ずるのであるが，それが新しい意味として既存の意味集合態の中に組み込まれ，世界の中へと，すなわち人間相互の存在交錯の中に定着するためには，その意味集合態の中に組み込まれている人間存在が相互主観的にその意味を承認しなければならない。すなわち，人間存在がその有意味的存在者を自らの日常性のルーティーンの中に取り入れて，自らの日常的有り方を構成する契機とすることによって，はじめて意味は世界を構成する契機となるのである。すなわち，意味集合態としての世界の内に組み込まれている人間存在，意味-内-存在としての人間存在が，新しい有意味的存在者へと己れの存在を関与せしめることに

よって，ある有り方を確立しつつ，世界の意味形態の維持へとその有り方を還元する中で，新しい有意味的存在者の意味は，世界を構成する意味集合態の中において己れの位置を得るのである。この様に人間存在の無数の組合せ，存在交錯において，意味が取り込まれ，それぞれの世界への関与の媒体となることにより，意味は世界の内に定着するのである。

（0－10）

そして，意味集合態としての世界の内に組み込まれた人間存在，意味-内-存在としての人間存在は，既に述べた如く，各々の時間的有り方に基づく自由の行使によって，意味を意味として理解し，それへと関与する。我々にとって，意味連関や連関内における意味相互間の差異は，意味を有する存在者から距離を置いてただ眺めるのみ，あるいは観察するのみ，といった関与の仕方においては明示されないのであり，我々の身体がそれらの意味連関へと没頭し，それらを媒介として自らの行為連関，存在連関を形成してゆく中において，意味相互間の差異は明らかになるのである。例えば，私がコーヒーを飲もうとして，コーヒーメーカーやコーヒーカップ，スプーン，ミルク，シュガー等々といった意味連関へと関わり，それらの意味連関の連なりへと自らの有り方を次々に適合せしめることによって，コーヒーを飲むという有り方に至る自らの行為連関，存在連鎖を築き上げてゆく中で，それらの諸々の意味相互の差異が意味連関において，あるいは私の身体の振る舞い構造の内へと取り込まれた中において，私のそれらとの関わりにおける存在連鎖の差異において，示されるのである。諸々の有意味的存在者の意味は，私によるそれらへの企投，私の存在のそれらへの適合において，自らを示すのであり，意味相互間の差異は，私がそれを媒介として確立する私の有り方の差異へと反映されるのであり，そうした中で，それらの意味相互間の差異が私によって把握され，理解されるのである。

しかし，諸々の意味はその様にして，私によって把握される以前に，世界によって規定されているのである。私は自らの実存において，主体的に意味

相互間の差異を理解するのであるが，しかし，そうした私の主体的有り方は，意味集合態としての世界によって贈与された有り方にほかならず，私が諸々の意味へと自らの有り方を適合して確立する存在は，私が意味集合態としての世界の内へと組み込まれて有る限りにおいて可能なのである，といえる。多数の人間存在による無数の存在錯綜によって構成される世界において，意味の集合態は産出され維持されているのであり，したがって，意味相互間の差異は，無数の人間存在の存在錯綜の中において規定されるのである。すなわち，意味集合態としての世界をそれとして維持するのは私を含めた無数の人間存在の存在錯綜によってであり，そこにおいて人間存在のあらゆる存在形態が刻印されるのである。人間存在の存在構造が分泌する存在の差異が自らの輪郭を描く場が世界であり，そうした無数の人間存在の存在の差異の反映が意味相互間の差異となって生ずるのである。すなわち，意味集合態としての世界の現在有る形態は，無数の実存の痕跡であり，過去における人間存在の有り方の痕跡の集積である。意味と意味との差異の空白を埋めるために，ある発明家や，あるいは企業のプロゼクトティームの開発によって，ある新しい有意味的存在者が産出されて，それが世に送り出された時に，人々がそれを自らの日常性を構成する意味契機へと取り入れることによって，その有意味的存在者は世界を構成する意味集合態の中に組み込まれて，その一契機となるのである。すなわち，その有意味的存在者の意味へと自らの存在を適合して，自らの有り方を築き上げた無数の過去の人間の実存の痕跡が，その有意味的存在者を世界構成契機として世界の内に定着せしめるのである。したがって，意味集合態における意味相互間の意味の差異は，無数の人間存在が過去において存在したその有り方の形態相互間の差異の意味への反映としての差異にほかならない。つまり，有意味的存在者の有する意味は，人間存在の存在と相関的であり，人間存在は有意味的存在者の意味へと自らの存在を適合することによって，自らの有り方を構築するのである。したがって，ある有意味的存在者が意味集合態としての世界の内に，世界構成契機として定着しているということは，過去において，無数の人間存

在がその有意味的存在者を媒介にして自らの有り方を構築した痕跡として，そうであるということである。したがって，例えば，コーヒーカップとスプーンという二つの有意味的存在者の意味相互間の差異は，人間存在がそれらへと己れの存在を適合して築き上げる有り方の差異の反映である。すなわち，私はコーヒーカップにシュガーを入れて，スプーンでかき回し，そしてコーヒーカップを手に持ってそれを口へと運んで飲むという所作を為すのであるが，この二つの所作，有り方相互間の差異が，スプーンとコーヒーカップという有意味的存在者の有する意味相互間の差異なのであり，それへの反映なのである。そして，この二つの有意味的存在者の有する意味相互間の差異は，かつてそれらへと己れの有り方を適合して，スプーンでコーヒーをかき回し，コーヒーカップでコーヒーを飲むという所作を為した実存の，あるいは意味への適合行為の痕跡としての差異であり，そうした二つの所作，二つの有り方の集積が二つの差異化された意味として，世界を構成する意味集合態としての世界の内に定着しているのである。

我々が有意味的存在者の意味へと関与し，意味相互間の差異を我々の実存の行使において把握する場合に，そうしたことをいちいち認識するわけではないのであるが，我々は既に無数の実存の痕跡としての意味集合態の一契機として，世界によって規定されているそれらの有意味的存在者の意味を追認するにすぎないのである。すなわち，我々は，スプーンでコーヒーをかき回し，コーヒーカップでもってコーヒーを飲むという有り方，所作を世界より贈与されているのであり，そうした差異化された有り方を，世界から贈与された意味への適合行為相互間の差異として，受け入れているのである。[12)]

12）ここまでの叙述は拙著『意味の現象学』（ミネルヴァ書房，1994）の内容と重複するところがある。しかし，社会システムという概念を取り入れたのは，この稿での新しい試みである。また，『意味の現象学』が，タイトル通り現象学的記述であったのに対して，本稿は社会システム等の社会学的観点からの記述もある。

I　環境の定義

（1－1）

基礎的な論述を一応終えたので，ここからいよいよ本論にはいる。まず，環境とは何か，という環境についての定義付けから入りたいと思う。まず，生物学者ユクスキュルの文章の引用から始める。

「主体の対象に対する関係は，機能環（Funktionskreise）の図式によって最も明瞭に表される。それは，いかに主体と対象が互いに適応し合って整然とした全体を形成しているかを示している。さらに，主体がいくつかの機能環によって同一の，あるいは異なった対象に結び付けられていることを考えれば，環境世界説の第一の基本的命題が何であるかを垣間見ることが出来る。すなわち，最も単純なものも非常に複雑なものも，すべての動物主体は，同じ完全さでその環境世界に適応している。単純な動物には単純な環境世界が，複雑な動物にはそれだけ豊かな環境世界が対応する。」[13)]

すなわち各々の生命体にはそれぞれの固有の環境が有るのであり，その生命体の有機体としての複雑さ，単純さに対応して，すなわちそれぞれの生命体の存在構造の単純さ，複雑さに対応して，同一の空間も複雑な環境になったり，単純な環境になったりするのである。したがって，環境とは生命体にとっての環境であり，即自的な空間をいうのではない。

「生態系（éco-system）とは個体を引いた生態系ではなくて，むしろ個体と共に有る生態系である。そして個体とは，生態系を引いた個体ではなくて，むしろ生態系と共に有る個体である。」[14)]

---

13) J. V. Uexküll : *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen*, Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main, 1983, S. 11.

14) E. Morin : *La méthode 2. La Vie de la vie*, Édition du Seuil, 1980, p. 67.

ここで突然生態系という言葉が出てきたが，環境と生態系の違いは，モランに

（次頁脚注へ続く）

ユクスキュルは，同一空間も，生命体の複雑性に対応して，異なった環境になる，ということを示す例として次のような事例を挙げている。すなわち，同一の部屋という空間が，人間にとって，犬にとって，蝿にとってそれぞれ異なった環境となる。部屋の中には，中央にテーブルが有り，その上にグラス三つと皿が置いてあり，テーブルの周囲には三つの椅子が有り，テーブルの上には天井から下がっているランプが有り，部屋の奥には本棚が有り，部屋の左にはオルガンと椅子，右側には長椅子が置いてある。そうした空間は，人間のために人間が作り，部屋の中の諸々の存在者も人間が配置したものであるが故に，人間にとってそれらすべてが関わりが有るものである。ところが，犬にとっての場合，その部屋という空間において，犬に関わりがあるのは，テーブルの上に置いてあるグラスと食事が入っている皿と椅子のみである。蝿にとって，その同一空間において関わりがあるものは，天井から下がっているランプとテーブルの上の食事のみである。すなわち，蝿にとっての環境が最も貧しいものである。[15] しかし，「この環境のみすぼらしさこそ，行動の確実さを約束する。そして確実さの方が豊かさよりも大事なのである。」[16]

すなわち，生命体の存在構造が単純になると，それが関与する空間内の存在者も少なくなるのであり，したがってその生命体にとって環境は貧しいものになる。人間にとって豊かな環境である部屋も，蝿にとっては貧しいものになるのであるが，しかし，その貧しさが，その生命体が環境へと適合して，環境の内に自らの存在を確保する確実性を保証してくれるのである。

環境とは，生命体が自らの生命体としての有り方を維持する場であり，す

よれば次の通りである。「すなわち，生物の間の相互作用は物理学的ビオトープが提供する束縛と可能性（それらはビオトープにフィードバックしてゆく）をみずからにとりこみながら，環境をシステムとして厳密に組織する，というのである。したがって環境はたんにテリトリーを示すだけの単位にとどまらなくなって，ひとつの組織を作り出す実在に転化したということである。これが生態系である。」*ibid.*, p. 17.

15) J. V. Uexküll, *ibid.*, S. 62.

16) *Ibid.*, S. 13.

なわち，自らを存在せしめる場にほかならず，それは生命体の有機体としての構造と，それに対応する存在構造に応じて，生命体が自らの周囲の空間を構成したものである。すなわち，環境とは，生命体によって作られたものであり，即自的な空間的場ではない。先の例で言えば，蝿にとっての部屋という空間内の環境は，蝿という有機体の存在の仕方との相関において形成されたものである。したがって，蝿にとって部屋の中のランプとテーブルの上の食事のみが存在するのであり，それ以外のものは，蝿という有機体の存在にとって関わりのないものであるが故に，存在しないも同様のものである。つまり，蝿は，その存在構造に対応して，本来人間が人間のために作った空間的場を，蝿が自らの有り方を維持する場へと作り変えたのである。それが結果的に，人間的環境と比べてきわめて貧しいものになったのである。

「我々は次の様に言ってよいだろう，すなわち，ある動物が為し得る行為の数だけ，その動物はその環境世界において対象を区別しうる。為し得る行為が少なく，少ししか作用像（Wirkbilder）をもたないならば，その動物の環境世界も少ない対象物から成り立っている。そうした環境世界は確かに貧しいが，しかしそれだけ確実なものとなっている。というのは，少ない対象物の中での方が，多数の場合よりも事を処し易いからである。」[17]

有機体は，自らが存在する場を，自らの有り方に応じて構成するのであり，環境とは，有機体の存在との相関において捉えられた場であり，即自的客観的な場ではない。ユクスキュルがいうごとく，多様な動作，多様な有り方をする有機体にとって，関与する対象も多くなり，それだけ環境は豊かになるのであり，また所作，有り方が少ない有機体の場合は，関与する対象も少なくなり，それだけ環境は貧しいものになる。有機体は，自らが存在する客観的場を自らの存在が適合し易いように，すなわち，その場へと自らの存在を根ざすために，自らの存在構造との相関において構成し直すのであり，つまり，有機体の存在の場，存在することが根拠付けられる場へと作り変えるのである。

17）*Ibid.*, S. 61.

（1－2）

その場合に，意味ということが問題となる。

「有機体はまた，現代物理学の諸体系と区別される。何故ならば，行動の不可分な統一は，物理学においては不透明な所与に留まるのに対して，生物学において，それは新しい種類の理解の手段となるからである。すなわち，生物学においては，個的有機体の諸特性は，次々にその有機体の行為能力に結び付けられ，そして，人間においては，身体の構造は性格の表現である。物理的体系の統一は相関関係の統一であり，有機体の統一は意味の統一（unité de signification）である。」[18]

「したがって，現象的身体（le corps phénomenal）の諸動作や態度は，固有の構造，内在的意味をもっていなければならないし，現象的身体は，はじめから，≪環境≫に対する作用の中心，物質的意味（le sens physique）の，あるいは精神的意味（le sensmoral）のある輪郭，行動のあるタイプでなければならない。」[19]

「我々が既に見た様に，科学が重視せざるをえない生命過程の意味と価値とは，確かに知覚された有機体の属性ではあるが，しかしそれが真の有機体にとっての外的な呼称ではない。何故ならば，真の有機体，科学の考察対象となる有機体とは，知覚された有機体の具体的全体性，すべての相関関係の担い手であって，分析によってそうした相関関係を発見できるときにも，それへと分解しえないからである。」[20]

すなわち，生命体が自らの存在構造との相関関係において，自らが存在している場を，自らの存在が根ざす場へと組み替える場合に，いわば場を意味化するということになる。すなわち，先に述べたユクスキュルが挙げた例を再び手がかりにすると，人間の部屋に入って来た蝿にとって，その場を自ら

---

18) M. Merleau-Ponty : *La structure du comportement*, Presses Universitaires de France, Paris 1977, p. 168.
邦訳『行動の構造』滝浦静雄他訳，みすず書房，1971，232ページ

19) *Ibid.*, p. 170，邦訳，234ページ

20) *Ibid.*, p. 169，邦訳，233ページ

の存在が根ざす場，すなわち環境へと組み替えるためには，自らがその場において存在していることに関わりのある存在者のみを意味化し，それ以外は場の環境への組み替えのプロセスにおいて排除するのである。すなわち，部屋の中に有るテーブルとか椅子とかオルガンを排除することによって，自らの有機体が関与しうる対象，すなわちランプ，テーブルの上の食事等を意味化するのである。

「生物において，個体的中心と周界との特殊な関係を認めることは，結局周界の理解に『意味』のカテゴリーを入れて来ることに外ならぬ。」[21)]

したがって，ここで言う意味とは，我々が今まで述べて来た意味とほぼ同様の意味を有する意味である。すなわち，何らかの主体が存在することにとっての意味である。しかし，人間以外の有機体は，自らが存在する場を環境へと組み替えることが意味化することであり，したがってそれは有機体の有機体としての機能と密接に繋がった意味化であり，人間における如く，意味と無意味との反転，あるいは図と地との反転は人間以外の生命体にはない。これを丸山圭三郎は＜身分け構造＞という。

「第一次分節が生み出す構造は，種のゲシュタルトで，これは人間が他の動物と共有する（ゲシュタルト自体は相違しても）＜身分け構造＞である。つまりは動物一般がもつ生の機能による種独自の外界のカテゴリー化であり，（身体と心の分化以前の）身の出現とともに外界が地と図の意味分化を呈する環境世界にほかならない。環境の諸要素は決して裸のデータとして存在するのではなく，常に＜生への関与性＞に即しての＜意味＝現象＞として現出し，それにかかわる身の方も環境世界を介して分節される。そこでは身体的個体は定位されても自我ではなく，言語以前――すなわち言語による「主客二分」以前――の感覚＝運動的分節が行なわれる。人間を含めた一切の動物は，この本能に基づく目的連関が作り上げる網の目によって沸沸と湧出する＜ピュシス physis＞の生成運動を過不足なく掬いあげ，生存のために無用　有用，有害　無害等々を弁別し，安全な道を選びとっているのであ

21）三宅剛一『人間存在論』，勁草書房，1980，43ページ

る。」[22)]

人間においても，身体による世界の分節化はあるが，人間の場合には，その都度の存在の仕方に従って世界の分節化は異なるのであり，異なったかたちでの世界の分節化を為す。したがって，図として知覚領域に浮かび上がった存在者が，存在の仕方の変化によって，地として背後に退くという，図と地の転換はあるのであるが，動物の場合には，己れが存在する場を環境と化するということが意味化することであり，したがってそれは固定的なもの，種の変化でもない限り転換が生ずることはない意味化である。

人間存在の場合には，意味-内-存在として，自己の周囲世界に存在する諸々の存在者を意味として捉えることは必然的なことであるが，ただ人間の場合には恣意的に意味の転換を為すことが出来る。諸々の意味は，既に述べた如く，意味集合態としての世界によって，あるいは無数の実存の痕跡によって既に規定されたものであるが，そうした，あらかじめ規定された意味を人間存在は別の意味へと変化させることが出来る。例えば，椅子を，高い所に有るものを取るための土台代わりに使用したり，牛乳瓶に花を生けたりすることは，そうしたことである。しかし，動物の場合には，そのようなことは不可能であり，動物の身体の機能構造に基づいて有意味化された環境世界は，転換するということはありえない。こうした，動物と人間の世界への関与の形態の違いを，シェーラーは次のように述べている。

「人間とは，無制限に≪世界解放的（weltoffen)≫に行動しうるXである。人間になること（Menschwerdung）とは，精神の力によって世界解放性（Weltoffentlichkeit）へと高まることである。

動物はいかなる≪対象≫をももたない。動物は自分の環境世界の中へと忘我的に自己を没入して生きるのであり，いわばカタツムリがその殻を持ち歩くのと同じように，動物は，自分の環境世界を構造として，自分が行くところ何処でも持ち運ぶ。――動物はこの環境世界を対象にすることはできない。環境世界をこのように独自に遠ざけ距離を取って世界（ないしは世界の象徴）と

22）丸山圭三郎『文化のフェティシズム』，勁草書房，1985，71－72ページ

する働きは，人間には可能であるが，動物はこれを遂行しえず，情念的，衝動的に限定された〈抵抗〉中心を《対象》へと転換することはできない。」[23]

人間は世界へと開かれて有るのに対して，動物は自らの環境へと忘我的に没入しているということは，動物の有機体の構造によってアプリオリに規定された存在の仕方が構成した環境へと，動物は無自覚的に自らを没入せしめ，人間の如く，意味化された環境の有する意味連関構造を変更することは出来ない，ということである。シェーラーの言う，人間の＜世界開放性＞を丸山圭三郎は，＜言分け構造＞によるものとする。

「人間が動物である限り，私たちもまた＜環境-内-存在 In-der-Umwelt-sein＞であり，この＜身分け構造＞のなかに生きていることは間違いないと言ってよい。ところが，人間だけがこのような本能の図式に加えて，もう一つのゲシュタルトを過剰物としてもってしまった時から人間となったのではあるまいか。これが私の仮説用語である第二次分節の結果生ずる＜言分け構造＞であり，その網の目は『シンボル化能力とその活動』という広い意味でのコトバによるゲシュタルトにほかならない。」[24]

これを我々の表現を用いるならば，人間存在の存在構造の複雑性である，ということができるであろう。言葉を用いるということも人間存在の有り方の一様態であり，人間が使用する言葉によって，人間の有り方がさらに分節され，その存在構造の複雑さを増大させていったのである。既に述べた如く，人間の存在の仕方と意味とは相関的なものであり，人間の存在は意味を媒介として作り上げられるのであるが故に，人間の存在構造の複雑さは，それに対応する，その存在が関与する意味を多様化させるのである。そして，人間存在は，その存在構造の複雑性に依って，多様な存在の仕方が可能であり，そのことは今述べた様に，多様な意味へと関与して，自らの有り方を構築してゆくことを可能にすると共に，人間以外の有機体の如く，意味が有機

23) Max Scheler : *Die Stellung des Menschen im Kosmos* (aus : *Späte Schriften*, Francke Verlag, Bern und München, 1976, S., 33.)
邦訳『シェーラー著作集13』亀井祐他訳，白水社，1982，50－51ページ

24) 丸山圭三郎，前掲書，73－74ページ

体の存在構造に対応して，その存在の場を環境化すると共に，つまり意味化すると共に，固定化してしまうということはない。人間以外の有機体の場合には，有機体の構造，あるいはそれに基づく存在構造と，意味とが固定的に連関し合っており，その連関の絆は有機体の構造そのものが変化しない限りは変化しない。人間以外の有機体の，有機体の構造に由来する環境世界の特定の意味への結びつきを，生物学者は本能という。人間の場合には，先に述べた如く，その存在構造の複雑さによって，多様な意味へと関与しうると共に，有意味的存在者の意味を転換することが出来る。あるいは，意味を産出することも出来る。環境とは，既に述べた様に，有機体が自らの存在を根ざす場であり，それを自らの存在構造に基づいて意味化した時に，場が環境となる。人間の場合に，人間以外の有機体の如く，与えられた場を，自らの存在構造に基づいて意味の固定した環境へと化するだけではなく，環境を大きく変える。すなわち，己れの存在が根ざす場の有する意味を転化せしめて，別な新しい意味をそこに付与することが出来る。所謂環境開発がそれであり，あるいは何も無い所に巨大なビルを建設したりすることもそうしたことである。

（1－3）

環境とは，生命体，有機体がみずからの存在を得る場であり，それの意味化されたものであるが，それでは意味の集合態としての世界と環境とは，どのような関係に有るのであろうか。環境とは，意味集合態としての世界の一部であるということが出来る。というのは，世界とは，多様な意味の集合態であり，環境の内に含まれる如き意味も含むが，それ以外のもっと抽象的な意味，例えば倫理的意味，美的意味，宗教的意味，法的意味等の集合態であり，そうした意味によって世界は成り立っているのである。すなわち，人間存在は，多様な意味へと関与することにおいて，多様な有り方を為しているのであり，そうした場が世界である，あるいは人間にそのような多様な有り方を与えるのが世界である，ということになる。[25] そして，そうした世界の

25）詳細は拙著『意味の現象学』参照

中で，環境は人間が身体的に存在する場である。少なくとも狭い意味での環境とはそのようなものである。例えば，自分の住む家，その周辺，街路，公園，海，山等々は，我々が自らの身体をそれらへと関与せしめることによって，身体的な有り方を形成する場である。言い換えるならば，身体的に存在する場が環境である。それに対して，世界は，環境を含めた意味集合態として，より多様な有り方を人間に贈与する。例えば，宗教的意味は，人間がそれに関わって自らの宗教的有り方を確立する媒介となる意味であるが，その有り方は，単に身体的な有り方を越えている。確かに，身体的に宗教的意味へと関わるのであるが，身体的に関わるのみでは，己れの有り方を宗教的意味へと関わらせしめたことにはならない。それに伴って，知覚されえない，すなわち現象的世界には存在しない宗教的意味への信仰という契機，つまりある意味では精神性が関与する有り方を要求するのが，宗教的意味である。美的意味に関わる場合にも同じことが言える。単に絵画を知覚するとか，音楽を聴くといった身体的な関与のみでは，美的意味に関わっている，ということは出来ないのであり，そうした身体的関与に伴って，それを基礎にして，知覚されたものにある美的なものを読み取るという精神的作用が有ることによって，はじめて美的意味へと関わるということが出来るのである。このように世界とは，多様な意味の集合態であり，その世界の一構成契機として環境が有る，といえよう。したがって，人間以外の有機体，植物も動物も環境を有するが，世界をもつのは人間のみである，ということが出来る。

（1－4）

人間の歴史は，いわば自然の環境化の歴史である，ということが出来る。自然という概念は，人間がそれを意味化して，自らが存在する場とした自然，すなわち世界の内へと統合された自然と，まだいかなる人間的痕跡もない自然，人跡未踏の自然も含む。自然を環境化すること，とは自然を意味化することであり，人間が存在することにとっての意味と化することであり，それはしたがって自然を意味集合態としての世界の内に取り込むということ

である。それは，世界を構成する意味集合態の自己増殖であり，そのことによる自然の人間的世界への取り込みである。あるいは，自然に人間的な刻印を押すことである。したがって，「自然的秩序は，そこにおいて人間達が位置付けられる網の目であり，個々の能力によって規定された相互作用の体系であり，要するに，人間-相互（inter-humain）の秩序である。」[26]

自然を即自的に見ることは出来ない。すなわち，自然を自然として，いかなる人間的刻印を押すことなく見るということは出来ない。自然は，それ自身においては無秩序であり，中心を持たない。

「したがって，他者の存在への要請は，多中心／無中心的相互依存と相互鎖（les interdépendance et les inter-rétroactions polycentriques / acentriques）の中に自己中心的存在（l'être égocentrique）を文字通り導入する。規制的遡及行為（les rétro-actions régulatrices）と食物連鎖の中で，それによって自己中心的存在は多中心的生態組織の中に留め金でくくりつけられる。」[27]

エドガール・モランは，生態系は多中心的，あるいは無中心的であり，生と死の反復による無秩序的秩序を有すると述べているが，これもモランが見た自然の一つの形態であり，そこにモランは明らかに人間的秩序を導入しているのにほかならない。

「あらゆる科学的認識と同様に，自然の認識は文化的，社会的，歴史的コントラストの中に位置付けられる。自然は単に人類-社会的現実の≪客観的≫基底であるだけではない。それは人類-社会的所産でもある。文化は自然に相貌を与えることによって自然を共同生産する。自然は我々より以前に，その外に存在するが，しかし我々なしでは存在しない。おまけに，生態学化された思考（la pensée écologisée）は次のことの理解を可能にする。すなわち，二重の生産（自然から出発した文化と文化から出発した自然観念

26) S. Moscovici : *Essai sur l'histoire humaine de la nature*, Flammarion, 1968, p. 78.
27) E. Morin, *op. cit.*, p. 46.

の)，が存在するばかりでなく，二重の生態学が存在する。すなわち，我々の文化つまり我々の社会は生きた生態学の中に存在するが，しかし同時に，我々の自然についての観念は脳髄＝文化生態学の内部に存在する。我々の文化は我々の自然諸観念の生態学である。」[28]

自然を認識するということは，先の引用文でもモスコビッチも述べている様に，そこに人間的秩序を導入することであり，人間的思惟が作り上げた論理的枠組みでもって自然を裁断することにほかならない。そして，そのように，自然の中に人間的秩序を導入することは，自然を世界の内に取り込む第一歩である。少なくとも現代においてはそうである。自然を環境化すること，人間存在がそこにおいて自らの根を降ろす場とすることは，自然に何らかの意味を付与することであり，言い換えるならば，自然を世界の意味集合態の一契機とすることである。

（1－5）

世界の肥大化，意味の自己増殖は，人間存在が新しい意味への適合によって，それを世界の内へと取り込み，定着させ，既存の意味集合態の中にそれを蓄積することによる。新しい意味は，既に述べた如く，既存の意味の空白，溝を埋めるために，企業が開発したり，発明家が発明したりすることによって産出されるのであり，構造的に見るならば，世界が意味を産出するのであるが，それが世界の意味集合態を維持する無数の人間存在によって，各々の日常的生活形態の内に取り入れられることによって，彼等の生活形態の内に定着することにより，世界の内へと定着するのである。いわば，意味集合態の自己増殖であり，世界の肥大化である。新しい有意味的存在者の開発，すなわち新しい商品の開発は社会システムが為し，それを流通機構に乗せて市場に齎らすのも社会システムであり，いわば世界の意味集合態を秩序付け，各々の人間存在の役割配分を為すシステムであり，そうしたシステムによって役割を配分された一人一人の人間存在であるが，そのように開発さ

28) *Ibid.*, p. 93.

れた意味を世界へと定着せしめるのは，各々の人間存在の意味へと適合する有り方である。すなわち，新しい有意味的存在者の意味へと自らの有り方を適合せしめることによって，自らの世界へ根ざした有り方，自らの存在の世界適合性を構成するならば，すなわち世界の諸々の意味へと適合して，意味内存在としての己れの有り方がより適切に己れの日常的存在形態を構成するならば，意味は各々の有り方，各々の日常性の内に定着することにより，世界へと定着する。

ところが，自然の世界への取り込み，世界への統合化，すなわち自然の環境化は，社会システムが為す。勿論，現代においてもそうであるが，かつての時代，過ぎ去った時代においても自然の世界への取り込み，自然の環境化は，現代ほど秩序立ったものではないとはいえ，意味集合態としての世界を秩序付け，世界構成員の役割を配分する社会システムが為した。中世の森林開墾について，歴史学者のマルク・ブロックは次の様に述べている。

「しばしば定住者にとってうさんくさい『森の住民』boisilleurs のあらゆる人々が，森の中を歩きまわり，そこに小舎をたてた。すなわち，猟師，炭焼き，鍛冶屋，野生の蜂蜜や蝋の採集者（古い文書の「ピーグル」bigres），ガラスや石鹸の製造の用いられた灰つくり，皮なめしや網を編むのにさえ用いられた樹皮の皮はぎ人たち。十二世紀末になお，ヴァロワ夫人は，ヴィリの森に，四人の家来をもっていた。一人は開墾者（われわれは既に開墾時代に入っている），そして他の三人は，罠の取り付け人，射手および「灰つくり」cendrier であった。森かげでの狩猟は，たんなるスポーツではなかった。それは，都市や領主の皮なめし人や僧院の書庫の製本所へ皮を供給し，また，あらゆる食卓や，さらに軍隊に食物を供給した。一二六九年の十字軍を準備したポワチェのアルフォンスは，塩漬け肉を『海外へ』outre-mer 運搬するために，オーベルニュにあった彼の広大な森林館において，多数の猪を屠殺することを命令した。近所の住民にたいして，森林は，当時はなお古い採取の慣習から今日ほど遠ざかっていなかったから，われわれがもはや考えられないほど豊富に資源を提供していた。かれらは，もちろん，そこへ木

材を取りにいった。木材は，われわれの石炭や石油や金属の時代におけるよりも，遥かに生活に不可欠のものであった。すなわち，薪，松明，建築材料，屋根ふきのための小板，城砦の柵，木靴，犂の轅，種々の器具，道路を固めるための小枝。いっぽう，かれらは，あらゆる種類の他の植物性の産物を，森林に要求した。」[29]

このように，13世紀のヨーロッパの密林を切り開く場合において，既にこのように役割の分化が為されており，それらが相互に連関し合って，森林という当時においては人跡未踏の自然を，世界の内に取り込む作用を為していたのである。現代において，自然の環境化，自然の意味化に対してシステムが果たす役割は著しい。現代においては，人跡未踏の自然は，中世の時代に比べると少ないが，既に何らかの形で意味化された自然――それは人間にとって既に何らかの形で環境であるが――そうした自然を開発することによって，そこに既に付与されていた意味を別の意味へと転換することを為すのは，社会システムである。例えば，川の上流に巨大なダムを建設することは，川という環境に既に付与されていた意味を別の意味へと転換することである。既に述べた如く，そのようなことを為し得るのは人間のみである。動物の場合は，その有機体のアプリオリな構造に基づいて構成された環境に拘束されている。巨大なダムを建設する以前にも，勿論そこには人は住んでいたが故に，川を中心とした自然は，そうした人間存在にとって，既に意味化された環境であった。すなわち，川を中心とした自然は，彼等にとって，そこで生活を営む場であり，川は釣りをしたり，夏に泳いだりする場としての意味を有していた。そこに巨大なダムを建設すること，すなわち，ある意味集合態としての世界へと社会システムが侵入することによって，そこに既に存立していた意味集合態を纂だつして，別の意味をそこに構築すること，すなわち意味の転換，既存の意味を，ある意味では破壊することを為すのは社会システムである。すなわち，人間存在が，その有り方に基づいて適所性を

29）マルク・ブロック『フランス農村史の基本性格』河野健二他訳，創文社，昭和48年，23－24ページ

築き上げた場，その適所性に基づいて意味を配分し，あるいは意味を付与していた自然を，別の意味を有する場へと作り換えることによって，いわば自然を別な形で世界の内へと再組み込みを為すのは，社会システムである。社会システムは，既に述べた様に，意味集合態としての世界の意味を秩序付け，その世界に帰属する人間存在に役割を配分することによって，個々の人間存在が関与する意味領域を限定する。そして，関与する意味領域を限定された人間存在，すなわち役割を与えられた人間存在の相互連関によって，システムは機能するのであるが，その場合に，システムからある役割を与えられた個々の人間存在は，システム全体が関与する何かに意味付与をする場合に，己れが存在していることにとっての意味を付与すること，すなわち意味集合態としての世界へと組み込まれ，そこから有り方を贈与されている一個の人間存在として意味付与することは許されず，システムに組み込まれた者として，すなわち役割として果たすシステムの機能として意味付与しなければならない。例えば，先の例でいうならば，川に巨大なダムの建設をするという役割を与えられている人間存在は，ダムを建設する川に，巨大なダムを建設すべき者としての意味を，意味付与しなければならないのである。

（1－6）

システムは，既に述べた様に，世界を構成する意味に秩序を与える，言い換えれば，世界に組み込まれて，世界を構成している意味を維持する人間存在に役割を配分して，個々人が関与する意味領域を限定する。そうしたシステムの作用は，言い換えるならば，新しい有意味的存在者を産出して，世界の意味集合態へと組み込む働きを為すことである，といえる。例えば，新しい商品の開発，それを市場へと齎らすこと等々によって，既存の意味集合態へと統合することである。それが世界に定着するかしないかは，世界を構成する人間存在がそれを己れの日常性へと取り込み，そこに定着せしめるか否かにかかっている。世界を構成する意味連関の空白を埋めるために，新しい有意味的存在者を産出すること自体は，構造的に見るならば，既に述べた如

く，意味集合態としての世界が為すことであるが，いわばそうした世界の意味連関の構造的空白性を埋めるために，新しい有意味的存在者を産出するのは社会システムであり，そしてそれを世界へと統合するのも社会システムである。社会システムは，その様な形で，世界の意味集合態を，あるいは人間存在の相互主観的行為構造を秩序付けるのである。意味を産出し，それを世界の既存の意味集合態へと統合する作用は，システムによって配分された役割を担った個々の人間存在の役割機能の遂行によって為されるのであり，意味の産出とそれの既存の意味集合態への統合のプロセス自体が，システムに基づいて為される。すなわち，社会システムは既存の世界の意味集合態を秩序付け，それへの個々の人間存在の関与を配分することによって，新しい有意味的存在者を開発し，それを既存の意味集合態へと統合することを試みる。そして，既存の意味集合態へと統合された新しい有意味的存在者が世界の内に定着するか否かは，先に述べた如く，世界に依存する，つまり，世界の意味集合態を維持する世界の構成員である個々の人間存在がそれらを己れの日常性へと取り込んで，己れの日常性を構成する媒体とするか否かに係っている。

そのように，システムは新しい有意味的存在者を作り出す如く，環境に対して新しい意味付与を為す。すなわち，先に述べた如く，環境を構成する既存の意味集合態を新しい意味集合態へと転換すること，既存の意味集合態の有する意味を纂だつして，新しい意味をそこに構築することである。例えば，熱帯雨林は，そこで生活している人間存在にとっての環境としての意味を有していたのであるが，それに木材資源としての意味を付与するのは社会システムである。すなわち，社会システムは，既存の意味を別の意味へと転換することを為す。あるいは，そのように意味の転換を為すことによって，環境そのものの物理的形態をも変える。そして，そうしたシステムによって役割を与えられた個々の人間存在は，ある社会システムに組み込まれている存在として，世界に，つまり環境に意味付与する。人間存在にとって，つまり世界の意味集合態の構成員としての人間存在にとって，世界から贈与される有

り方は多様であり，熱帯雨林への意味付与の仕方も一様ではないし，ダム建設予定地としての河川への意味付与の仕方も多様である。ところが，彼等が社会システムから配分された役割遂行を為す人間存在として存在する場合に，環境にそのように多様な意味付与を為すことは許されず，彼等が有するシステム機能が企図する意味付与に即して環境へと関わらなければならない。

個々の人間存在が恣意的に有意味的存在者の意味を転換すること，例えば，先に述べた牛乳瓶を花瓶代わりに使用することによって，意味の転換を為すことは，確かにその人間の個人的思い付きではあるが，しかし，牛乳瓶を花瓶に変えるということは，いわば，人間存在の有り方そのものの転換を為すことを意味する。すなわち，牛乳を飲むという有り方の媒介としての有意味的存在者を花瓶へと転換するということは，それへと関わる人間存在がその有意味的存在者への関わりを，牛乳を飲むという有り方から，花を生けるという有り方へと転換するということを意味する。すなわち，存在者への関与形態の転換が為されるのである。そうした己れの有り方の転換，同一の存在者への関与の仕方の転換，あるいはその存在者を媒介として築き上げる有り方の転換は，自らが産出するものではなくて，世界から贈与されたものである。牛乳を飲むという有り方も，花を生けるという有り方も，その人間存在が自ら産出した有り方ではなくて，世界の既存の意味集合態，相互主観的行為構造の内に沈殿している有り方にほかならず，したがって，そうした世界から汲み上げた，あるいは世界から贈与された有り方にほかならない。したがって，恣意的に有意味的存在者の意味を転換するということは，有意味的存在者の意味の転換を為す人間存在の恣意的有り方に基づくものではなく，既存の意味集合態の間に沈殿している有り方相互の転換に基づく意味の転換なのである。

それと同じ様に，社会システムが環境の意味転換を為すこと，あるいはそれに基づいて環境を物理的に地形的に変えることは，社会システム自らが産出したことではなく，それもいわば世界から贈与されたものである。先に述べた，社会システムに即して新しい製品が作り出されることも，いわば世界

の意味連関の空白，溝を埋めるためのものであり，いわば世界からの要求である。それに基づいて社会システムは新しい有意味的存在者を作り出し，それを世界の既存の意味集合態へと統合することによって，既存の意味相互の連関を，あるいは人間存在の有り方構造を形成する意味相互の関係構造を転換するのである。同様に，社会システムによる，環境の有する意味転換も，世界から要求されたものである。熱帯雨林の伐採も，河川にダムを建設することも，世界の意味連関の空白，溝が要求するものであり，言い換えるならば，世界の意味集合態を維持することによって，世界からその都度の有り方を贈与される個々の人間存在が要求するものである。すなわち，世界の意味集合態の中に組み込まれることによって，己れのその都度の有り方を構築している人間存在が，世界を構成する意味集合態によって己れの有り方を築き上げるために，ダムが産出する電力や水，あるいは熱帯雨林の伐採が齎らす材木を必要としているのである。そうした相互主観的行為構造としての，あるいは意味-内-存在としての人間存在の集合として，あるいは意味集合態としての世界の要求により，社会システムは環境の意味を転換し，新しい意味において世界へと再統合を為すのである。そして，そのように，社会システムは，世界の要求に基づいて既存の世界の意味集合態へと侵食し，既存の世界の形態を，つまり意味集合態の形態を破壊するのである。すなわち，世界は社会システムを媒介にして，自己自身の形態を変えるのである。

【付記】本稿は徳山大学総合経済研究所一号研究Ａに基づくものである。